

自己への気づきを促すアート表現の可能性

—可視化・空間化された自己世界の検討を通して—

学校教育研究科

教育コミュニケーションコース

M21006G

名田文子

1. 研究の目的と問題意識

本研究の目的は、対話的自己論で提言された複数の「私」をテーマとしたアート表現活動を行い、自己が可視化される際に生じる内的体験はどのようなものなのかを探ることである。

①自己の内実が表出されるアート

アート表現には、その内面の実態が制作者の意図を超えて表出されることがある。アートには本音が現れやすく、訓練を積んだ芸術家であっても全てをコントロールすることはできない。まるで「生まれ出る」かのような自律性を、アートは持っているのである。

このとき、意図せず現れ出るものとは、いったい何なのだろう。それは、自己世界の中からあふれ出た「心の声」のようなものなのではないだろうか。

②対話的な自己

ハーマンスら（2006）の「対話的自己」の概念では、自己の世界にはさまざまな「私」が多数のポジションとして存在すると仮定する。想像上の空間に位置づけられたさまざまな「私」がそれぞれ「声」を持ち、賛成したり反対したりして対話的な関係をつくっていくのだとされる。そして、あるポジションは承認されて強く発達していくし、また別のあるポジションは抑止されたり無視されたりするということが起こっているという。

③アートで未知の「私」と出会う

本研究では、アート表現に意図せぬものが現れ出る現象を、自己世界で抑止的な立場におか

れた「私」の声が意識の検閲をすり抜け、色や形に変換されたものであると捉える。

言語的・意識的な自己探求では見出すことができない「私」と、アート表現活動を介してなら出会うことができ、その「未知の『私』」との出会いは自己への新たな気づきを促すものとなり、自己概念の更新や自己受容につながるのではないかというのが、本研究における仮説である。

2. 本研究の調査

アート表現活動によって自己への気づきが起るとき、制作者の体験はどのようなものなのだろうか。それを捉えるため、本研究では、自己世界にいる複数の異なる「私」をイメージして素材を選び、台紙上に配置するという内容のアート表現活動をしてもらい、制作後、その活動に関するインタビューを行うこととし、大学生6名の協力を得て調査を実施した。

3. 調査の結果

アート表現活動と語りの結果、6名全員が自己に関する新しい気づきや再確認的な気づきを得ていた。また、自己開示や自己受容を促されており、自己について考えることの楽しさや面白さについての感想が述べられた。この結果から、本調査でのアート表現活動は、自己への気づきを促すものであったと結論づけた。

アート表現が自己への気づきを促すものになる要因としては、①自ら作り、それを眺めることの効果 ②作り上げたものを介した他者とのコミュニケーションの効果 が考えられた。

4. アートによる「自己への気づき」の様相

①素材を介した「私」との出会い

制作者がさまざまな「私」に気づくきっかけとなったのは、素材であった。例えば、珍しい絵柄のボタンから「何でも新しいことをやってみよう『私』」がイメージされたり、羽毛が「フワフワと人の意見に流されてしまう『私』」の象徴として選ばれたりした。このとき素材は単なるモノではなく、自分のある特質を示すメタファーとして機能していたと考えられる。

②素材の位置が表した複数の「私」の関係性

素材が置かれた位置には、自己世界での「私」と「私」の関係性や重要度が現れていた。心理的な距離が、アート表現の上には物理的な距離に変換されるということが起こっていたのである。これは、自己世界の複数の「私」の関係性が空間的に可視化される現象だと言えるだろう。

③自己世界の全体性

自己世界での「私」同士の重要度や勢力のバランスが面積の広さに変換され、自己世界全体の様相を捉えるということも起こっていた。複数の、個別の「私」を表すことに特化したアート課題であったのに、心の外側や、自他を区別する境界の表現も現れ、環境も含めた自己の全体性を捉えることが自然発生的に起こっていた。

④「なぜかやってしまった」が促す「私」との出会い

「未知の『私』」への気づきが起こったときの体験過程においては、「なぜかやってしまった」という、制作者の意図を超えた行為があったという特徴が見出せた。

理屈抜きの強い確信をもって「どうしてもこの素材を使いたい」と瞬間的に決断されていた場合、その「未知の『私』」は、実は自己にとって大切な存在であるのに今まで意識化されていなかった「私」であった。

この体験とは対照的に、制作後に「あれっ、なんでこれを選んだのかな」と自分で不思議に思うほど何気なく素材を選んでいた場合もあった。後者の場合は、明確な出会いの体験が生じるのは、アート表現を共同注視する他者との言語的なやりとりにおいてであった。無意識的に現れ出した「私」は、作品上に姿を現したとしてもそのままでは見過ごされてしまうことになる可能性が高いと思われる。

5. 総合考察

①深い気づきの特徴

これらの結果から、アート表現活動が自己への気づきを促す可能性を持つものであることが明らかになった。そして、アート表現活動による気づきは、生き生きとした気持ちの動きを伴っており、知的・表面的な自己認識よりも深い情緒的洞察となりうることが示された。ただし、その気づきが本人にとって意味あるものとなるためには、非言語的な回路であるアート表現活動における自己の表出だけでなく、言語的に意味づけることも重要である。

②アート表現の場での対人関係

アート表現活動によって現れるのが自己の内面であるということは、表現活動を行う「場」における対人関係によっては、それが深い傷つき体験になってしまうということでもある。アート表現への否定的評価は、実は自己のありようを否定されることなのだが、多くの方は「下手だから」と技能上の優劣の問題に帰着させることで自分を守ろうとする。

このような傷つきを生まないためには、その「場」を共同創成する他者が、客観的作品評価を行わない非権威的な関わりをしていくことが求められる。

主任指導教員 中間玲子
指導教員 中間玲子